

看護師研修を終えて

播井 真美

今回の研修は、「活動のとりえ方を見直して、日常生活の中にある活動の要素を言葉にする」というねらいのもとに行われました。活動をどのようにとらえているか、日常生活の中で「活動」につながると感じられる場面はないか、日々のケアは活動となるのか、などを考えるものでした。

研修は、ねらいにそって書いたレポート発表、質疑・応答、グループ討議とすすんでいきました。レポート発表では、利用者との関わりを振り返り、実体験をもとにかかれたものが多く、その内容に共感し、納得させられるものがほとんどでした。

グループ討議では、「日々のケアは活動になるのか」という問いに対し、答えが「イエス」であることを前提に意見交換がなされました。まずは自分の関わりを振り返ることから始めましたが、言いたいことをなかなか言葉にできず、また周りのメンバーも、言いたいことはわかるのだけど……といったもどかしい時間が流れました。

そんな中あるメンバーが、日常的に行われているケアの

中でも、入浴介助が一番好きだと話し始めました。利用者さんがお湯につかることで、筋緊張が緩み、利用者さんの体の重みが自分のうでに寄りかかってくる感覚が好きだという意見でした。私はこの意見を聞いたとき、日々繰り返しされる入浴という場面で、そこまで利用者さんのことを感じられる感覚の鋭さ、観察力に感心させられました。また、そんなふうを感じながら行っているケアは、良質なものに違いないと思いました。他のメンバーもこの意見と同じように、自分の好きなケアについて話しました。

グループとして、『日々繰り返されるひとつひとつのケアの中でも、利用者さんの反応を観察すること、常に快なか不快なかどうかを意識することで、日々のケアは活動と呼べるものになるのではないかと、全てのケアを日常活動として関わることは、看護において最も重要とされる安全安楽の看護の提供と同等に行われるべきものであるのではないかと』という話しになりました。とことん話しあい、メンバー全員が達成感を感じていたように思います。ただ、私自身、利用者さんの反応に気付けるような鋭い感覚があるのかと

不安が残りました。

おおぞら療育センターで働き始めてから、自分の看護観を見直す機会が多くあり、これまでの自分の看護を恥じることも少なくありません。利用者さん、スタッフとの関わりを通して少しずつ成長していきたくと考えており、今回の研修もさらに自分の看護観を見直す良い機会となりました。(こだま 看護師)

第二〇回 重症心身障害療育学会 学術集会参加報告 鈴木 幸恵

一〇月五日・六日に小樽市で開催された第二〇回重症心身障害療育学会学術集会に参加したので報告します。

今回私は、うららの仲山さんと「日常活動報告会の意義」という演題の発表をしました。発表内容は、二〇〇六年度から実施している日常活動報告会について、内容や経過、家族・職員にとつての意義などをまとめたものです。

ゾーン単位で行われてきたことをまとめてみて、利用者一人ひとりの様子を個別支援計画に沿ってまとめて発表する形が増えてきていること、そうすることで家族の方に通常の職員の関わり方がより伝わり

やすいということなどが分かりました。また、報告会があることで、職員の意識も年々変わってきていて、日常の関わりを質を上げることや記録に残していくことの重要性が認識されてきていることも感じ、家族の方へ伝えることに加えて、職員にとつての意義についても発表に盛り込みました。

発表後の質疑応答で、この取組みを是非やってみたくてという言葉をいただきました。日常活動報告会が他施設の職員にも認められ、とても励みになりました。

今大会は、全国の施設から一一一題の演題の発表がありました。重症心身障害児(者)のケアや生活についてのあらゆることへの取組みが、様々な職種から発表されていて、参考にしたものも多くありました。中でも私が印象に残ったのは、誤嚥性肺炎を繰り返して食事の経口摂取ができなくなつた利用者の笑顔を取り戻すため、本人が食事以外で好きだった音楽で楽しみ方を広げようとした取組みです。

本人の様子を、経管栄養になつて笑顔が見られなくなり不眠傾向になつた「ショックの段階」、少し落ち着き職員が音楽を聴こうと誘つと少し反応をみせてきた「模索の段階」、

本人が希望する時に音楽が聞けるように環境設定し少しずつ笑顔が見られるようになった「希望の段階」、本人がラジカセを操作し聞きたい曲を探すようになり職員との関わりが増えてきた「新たな可能性の段階」と分析していました。

各段階での写真があり、最近の写真は満面の笑みでした。「利用者を様々な角度で観察し、可能な限り気持ちを汲み取り、本人の思いを尊重することでの互いの距離が近くなり、自分から思いを伝えようとする表現が増えてくる。それが精神的な安定や活気に繋がる基盤だと実感した。」という言葉が考察にあり、利用者の生活について、職員全員で丁寧に関わり、検討を重ねることが大切だと私も実感しました。

すばるにも、嚥下機能の低下が見られる利用者がいます。嚥下機能だけでなく、様々な機能の低下が重症者には健常者よりも早く訪れると言われます。しかしそのことへのケアは対処療法的で、まだまだ未知の部分が多いのが現状です。利用者の変化に気付き、その時々で細やかな対応をしていけるように、利用者や職員とのコミュニケーションをもっと大切にしていきたいと感じました。(すばる 介護職員)